

第 28 回いたばし国際絵本翻訳大賞 イタリア語部門 講評

今回の課題絵本は、本好きの皆さんにはたまらない、本の誕生と図書館をめぐる、ファンタジーたっぷりの物語でした。とはいえ、細部までしっかり理解しようと思うと、哲学的なところや、抽象的なところ、曖昧なところがあって、とても難しかったですね。

まず、最初のページで登場し、繰り返し用いられる *in una terra con un nome che a volte suona bene, ma che nessuno conosce* (p.1) という文章からして、難問です。 *che a volte suona bene* は、「ときに響きがきれいな」「耳に心地がいい」という意味です。この *che* の先行詞は、直前の名詞 *nome* ということで問題ありませんね。ですが、次の *che nessuno conosce* の先行詞は、*terra* にまで戻るのか、あるいはここもやはり *nome* なのか、わかりにくいところです。論理的には、*terra* という名詞に、*con un nome che a volte suona bene* と、*che nessuno conosce* というふたつの修飾句がついていると考えたほうが自然かもしれません。すなわち、「響きのきれいな名前だけれど、誰も知らない土地」。とはいえ、文法的には先行詞が直前の *nome* だという解釈も成り立ちます。試しに何人かのイタリア人に尋ねてみたのですが、意見が分かれました。おそらく、著者が意図的に曖昧に書いたものだと思います。言葉は生きていますから、このように複数の解釈が可能なこともあるのです。これを、たとえば「誰も知らないけれど、響きのきれいな名前の土地」と訳すと、イタリア語の持つ曖昧さも含めて日本語にすくいあげることができますね(ちなみに、採点の際にはそこまで求めていませんのでご安心を！)。

さて、そんな土地に住んでいるおじいさんが、タイプライターを叩いているわけですが。 *un vecchio pezzo di ferro* (p.3) 「古い鉄のかたまり」は、タイプライターのことを言い換えた表現です。 *pezzo* は、そのあと *un pezzo di terra* (土地の一角)にも用いられているように、「部品」という意味だけでなく、「ある程度まとまった量のかたまり」を指す時に使います。おじいさんは、このタイプライターで昔話をたくさん書いてきたので、語り出しの言葉にあたる *c era un volt* の 10 文字がすり減ってしまっているわけです。つまり、*C' era una volta* ですが、タイプライターのキーの話なので、*a* の文字が1回しか書かれていないことに注意が必要です。この文字をどう扱うかも悩ましいですね。アルファベットそのままですと文意が伝わらないので、日本語に置き換える必要があります。だからといって「むかしむかし」では、同じ文字が2回ずつ使われているので、この場合にはあまり適切ではありませんね。「むかしあるところに」でしたら、すべて異なる文字ですし、長さとしても原文に近いものになります。イタリア語と日本語を併記してくださった方もいますが、絵本の場合にはスペースが限られていますし、小さな子にもわかりやすいというのが大原則になりますから、原語を書く必要はないでしょう(幸い、絵にもそれぞれのキーにアルファベットは書かれていません)。

物語を書きあげたおじいさん、なにやら行動に移ります。 *Il vecchio si lasciò suggerire dal caso il luogo perfetto per fare ciò che andava fatto.* (p.6) このあたりから哲学的になってきますね。 *ciò che andava fatto* は、「すべきこと」、*lasciarsi suggerire* は、「助言されるに任せる」という意味です。このような *lasciare* の用法は、状況に身をゆだねるときに用いられます。文章全体は、「おじいさんは、すべきことをするための完璧な場所は(どこかという)偶然からの助言を受け入れる」という意味に

なります。ですが、これだとちょっと直訳すぎて、物語の雰囲気が出なくなってしまいます。最優秀翻訳大賞の方は、「おじいさんは、やらなくてはいけないことに ぴったりのところへ、うんめいにみちびかれるままに すすんでいきます」と訳してくださいました。

おじいさんが埋めた原稿から芽生えた木に、たくさんのページが実りました。Pagine che lasciavano rotolare fuori, senza badarci tanto, i protagonisti delle loro storie (p.13)。rotolare fuori は、「転がり出る」という意味です。ここでも、また、lasciare が用いられていますね。直訳すると、「あまり構わずに、それぞれの物語の主人公たちが、転がり出てくるのに任せているページたち」という意味になります。ここも、やはり直訳ではぎすぎすしてしまうので、意識が必要になってきます。この文のように、物や抽象名詞が主語の場合、「それぞれのお話の主人公たちは、お構いなしにページのあいだから飛び出してきます」などと、思い切って主語を入れ替えてしまうのもひとつの手だと思います。

このページ、幻想的な描写が続きます。Si accartocciavano e si piegavano in continuazione, per dare vita a creature troppo belle per essere vere (p.13)。主語が省略されている場合には、前の文章の主語と同じだと考えるのが妥当です。ですので、この文の主語は「ページたち」。「本物とは思えないほど美しい生き物たちに息を吹き込むために、ひっきりなしに丸まったり折れ曲がったりしています」という意味です。

そうして生まれた本たちが図書館まで旅をして、子供たちを物語の世界に誘うというわけです。皆さんもきっと、この絵本に描かれているような夢中になれる本との出会いを経験したことがあるのではないのでしょうか。

タイトルの、Il giardiniere dei sogni もなかなかファンタジックですね。皆さん、いろいろと工夫を凝らしてくださいました。「ゆめのたねをまく人」「ゆめをそだてるおじいさん」「おじいさんと夢の木」「おはなし、おおきく そだったら」「ものがたりが うまれる ところ」などなど、並んだタイトルを読んでいただけでワクワクしてきます。

以下にいくつか、解釈の難しかった部分や、間違いの多かった箇所をあげておきます。

・1 ページ un vecchio omino: 「小柄なおじいさん」という意味です。omino は、uomo に「小さい」という意味の接尾辞 -ino がついて、語頭の u が省略された形です。「大人びた子供」というような意味でも使われることがあるので、小学館の伊和中辞典では語釈が「生意気な男の子」となっていますが、ここは本来の「小柄の男の人」という意味です。辞書の訳語にあまり惑わされないようにしましょう。「小人」という意味でもありません。

・15 ページ i fogli erano maturi: 「紙は熟れている」。前のページまでは、foglie と、女性名詞の複数形でしたから、「葉」という意味でしたが、ここから男性名詞の複数形、すなわち「紙」となっていることを見落とさないように。

・19 ページ centinaia di fogli: 「何百枚という紙」。「百枚」という誤訳が目立ちましたが、centinaia が単数形、centinaia は複数形です。時々こうした変則的な複数形があるので注意しましょう。

・19 ページ per farli andare d' accordo: accordo には、「調和させる」という意味もあります。ここでは、「なじませるために」「まとめるために」といった訳語が適切でしょう。

・22 ページ *inseguendo la loro necessità di sentirsi altrove: la loro necessità* は、「本たちの必要性」ですね。「別の場所にいるのだと感じたいという必要性に駆られて」。ここも、直訳するとなんだか論説文みたいになってしまいます。優秀賞の方は、「どこかにある、行かなければならない場所へ、せき立てられるように旅立ったのです」と意識してくださいました。

・32 ページ *In quell' intricato groviglio di storie*: 図書館の書棚の描写ですから、本がごちゃごちゃに置かれているわけではありません。さまざまな物語が書棚にあれこれ詰め込まれている状況を、このように表現しています。

・34 ページ *Tra gli scaffali gironzolava un bambino come tanti altri*: ここも解釈にとても迷うところなのですが、*come tanti altri* は、*gironzolava* ではなく、直前の *un bambino* を修飾しています。ですので、「どこにでもいるような男の子が、書棚のあいだを歩きまわっていました」という意味になります。

・34 ページ *Lo vide: così, per caso, come succede con i colpi di fortuna: colpo di fortuna* は、「思いがけない幸運」。「そうして、偶然、思いがけない幸運に見舞われたときのように、その本を見たのです」という意味になりますね。

今回の課題絵本は、文意は理解できても、そのまま訳すとなんだか哲学的すぎて硬い翻訳調になってしまうのが悩みどころでした。上述したように、物質や抽象名詞が主語の文章は、そのままでは伝わりにくいと思ったら、適宜主語を入れ替えたり、品詞を入れ替えたりしながら訳してみてください。まず意味を正確につかんでから、訳文をかみくだいていく必要があります。先を焦って、意識しながら文章を解釈しようとする、独りよがりな訳になってしまいがちです。最初は翻訳調でも硬くてもかまいませんから、とにかく正確さを念頭に全文を訳してみる。それから、硬いと思った部分を訳しなおす。それができたら、もう一度テキストと照らし合わせ、訳し洩れや、思い違いがないか全文を通してチェックする。その後、いったんイタリア語から離れ、訳文だけに集中して読み返し、日本語としてのリズムや流れを確認する。次に声に出して読んでみて、つかかかって読みにくいところを修正する。仕上げに、この本を読み聞かせたいなと思う年齢のお子さんや、ふだん絵本と親しんでいる大人に聞いてもらう、といった何段階もの推敲&ブラッシュアップを経ることによって、理想の翻訳に近づけることができます。遠回りのようですが、推敲を重ねることで、自分の書く日本語に対する批判眼も養われていきます。迷ったときには図書館へ行き、いろいろな絵本と出会ってください。きっとそこに答えが見つかるはず。 *In bocca al lupo!*

イタリア語部門 審査員 関口英子